

Nadine Gordimerの*The Late Bourgeois World*における「学校」像についての小考 —「英文学領域」としてのアフリカ文学研究—

小西 智也

Tomoya KONISHI

要旨

南アフリカの白人女流作家であるNadine Gordimerは、当時のアパルトヘイト社会に抗うべく、生涯を通じて数多くの作品を世に送り出してきた。本稿では、1966年に発表された短編小説*The Late Bourgeois World*の中で、主人公Elizabeth Van Den Sandtとその息子Boboという複数の視点を用いて、バンツー教育法下の白人社会における学校という場所の醜怪さが巧みに表出されていることを確認した。その上で、そうした様相が英文学作品として描かれることの意義について検討し、それが英語の国際性と近代性の故に、南アフリカの外部世界に対してその抑圧的な姿を暴くばかりでなく、カラー・バーを越えて黒人らと交渉する可能性を持ち得たことにあると結論した。特に、本作においては、その交渉に求められる誠実性を担保する存在として、学校という素材の重要性を主張している。また、その一方で、英語使用が支配者層の言語を操る白人であるという事実を浮き張りにし、それに伴うGordimerの宿命的限界もまた明らかにしている。

0. 開校70周年記念号によせて

本稿執筆のお話を頂いたのは、ちょうど初めての卒業生を送り出そうとしていた、とある1月上旬の日のことであった。およそ「英語に関する事柄」を、とのご提案であったように記憶している。ところが、如何せん、かつて「教育行政学」という領域を専門とした自分にとって、とりわけそういった分野に関して論文を書くことへの自信などは、一切と言って差し支えない程に無かった。また、付言するなら、これが広く英語に関わる諸学問を専攻してこなかったという、着任以来潜在的に抱いてきたある種の劣等感と、否が応でも向き合わざるを得ない時を過ごすきっかけともなった。しかし、そうであるとはいえ、縁あって頂戴した機会と思い立ち、この70周年節目の記念誌に、拙論を寄せさせていただいた次第である。それに当たって、ひとまずは、拙者が大学在学中に残した種々の授業レポート等を手当たり次第に読み漁り、自らの問題意識を探る作業を本研究の足掛かりとした。従って、包み隠さずに言えば、本稿は実に3ヶ月弱という限られた時間の中で、学生時代の遺物をふと掘り返したことに端を発

こにしともや：英語科教諭

キーワード：ナディン・ゴードイマ、アパルトヘイト、学校

したものである。それ故に尚更、読者の読むに耐えられる自信は無いというのが率直なところであり、大方の叱正をお願いしたいと思うばかりである。

さて、此度の執筆を通じて、兎に角も一つ痛感したことを挙げるとするならば、それは本校に着任して以来、自分が所謂学問の世界からは、すっかり遠ざかってしまったという反省の念であった。そのことを思えば、実に冗漫な論文となってしまった本稿の出来についてはさて置くこととしても、今回の経験が現在の自分に新たな気付きをもたらしたことは確かである。願わくは、本稿の拙さがまた、数年後の自分に何らかの刺激を与えてくれるものと期待して、冒頭に添える言葉としたい。

1. 問題意識の所在

本稿は所謂「英文学」について論じたものであり、その対象としたNadine Gordimer（ナディン・ゴードイマ、1923年11月20日-2014年7月13日）は、南アフリカの作家である。ところが、我が国の一般認識においては、この「英文学」と「アフリカ」という2つが、どうも結び付きづらいように感じられる。ここには、「英文学」、「英語文学」、「アフリカ文学」、また「アフリカ英語文学」といった、諸学問の守備範囲における混乱を巡る、容易に見過ごされかねない問題が内在している。そこで、作品の考察を始める前に、多少の遠回りを覚悟の上で、この問題から論を起こしてみたい。

まず、日本語で「英文学」と言ったとき、そこには、次の3つの領域が想起されよう。それは、1つには、最も単純に「イギリスにおける文学」、もう1つは、より広義に「イギリス文学とアメリカ文学の総称（所謂「英米文学」の略称）」、あるいは、3つ目には、「地域を問わず英語で書かれた文学全て」を意味する、と言った具合である。確かに、例えば、かつて1937年に研究社が出版した辞典は「英米文学辞典」と題されていたが、それが今では「20世紀英語文学辞典」（研究社、2005年）もしくは「英語文学事典」（ミネルヴァ書房、2007年）という名称へと変化を遂げ、また、学科の名称も「英米文学」ではなく「英語文学」を冠する大学が目立つようになってきている。加えて、意識的に「英語文学」という言葉を使用する研究者も増えてはいるものの、やはり、一般的に英文学が想起するものは、前述の「イギリス文学」、もしくは「イギリス・アメリカ文学」を指す領域として捉えられる傾向が強いように感じられてならない^[1]。

ところが、英語で「英文学」を意味する“English literature”は、英語圏においては20世紀になって、この言葉の定義そのものが、既に大きく変化していることを看過してはならない。

[1] ちなみに、日本で「英語圏文学」と言ったときには、イギリス・アメリカ以外の英語文学を指すことも多い。

かつて「英文学」は、とりわけ19世紀に学問分野として特権化されてゆく過程^[2]の中では明確に、「イギリスにおける文学」を指していた。これはまた、帝国事業や商業におけるヨーロッパ列強間の競争が激化し、イギリスによる植民地主義が生み出された時期とも重なっており、そういった意味で、英文学とは元来、多分に政治的性格を孕んだ現象であると言える。ところが、イギリスが世界に保有していた植民地が英語圏となり、また、英語が世界で使用される言葉となる^[3]につれ、その各々の地域で、英語によって書かれた文学が生まれてきた。そうした歴史的背景に呼応する形で、「英文学」はやがて、「英語によって書かれた文学」を意味することが増えてきたのである。そのため、現在では、英語で書かれた文学は“English language literature (s)”, もしくは“Literature (s) in English (es)”, あるいは“Anglophone literature (s)”（「英語圏の文学」）と呼ばれている^[4]。こうしたイギリス以外の英語文学は、大別すれば、「植民地に殖民した白人の文学^[5]」、あるいは、「被支配者たちが使用を強制された英語で残した文学」という、この2つに整理される^[6]。そういった文学、特に、後者の中には、かつてのイギリスの植民地支配だけでなく、その搾取と支配の形が、例えば、宗主国によるアフリカ等への介入や人種差別に存続していることを暴き、宗主国の実は植民地主義的な価値観の相対化を目指すものも多い。それ故に、このようなイギリス以外の文学は、特に1990年代以降、その歴史的経験を共通の基盤として「ポストコロニアル文学^[7]」と称されることがある。このような対抗言説的な実践が結果として、「“English”や“English literature”は、イギリス人が話したり書いたりしたもののみが学ぶに値する」といったイギリス中心主義的思想の相対化、ひいては、“English language literature (s)”という枠組みの台頭を促すこととなった。また、そういった文学は、普遍的な価値があると思われていたイギリスの文学に潜む、植民地主義や差別意識を暴く動きにも繋がっていったのである。我が国における「英文学」を巡る同様の変化は勿論、このような動きを反映したものであるが、その動きは比較的遅れていると言わざるを得ない。その理由は、1つには、我々が未だにヨーロッパを崇拝する植民地化された精神から完全に自由にはなっていないこと、そして、もう1つには、それ故に、西欧列強と肩

[2] 大略すれば、オックスフォード・ケンブリッジ両大学の教育課程に加わったことで決定的となり、1921年のニューボルト報告で再確認される、という過程で発展した（『ポストコロニアルの文学』p.14, ビル・アッシュクロフト, ヘレン・ティフィン, ガレス・グリフィス 著, 木村茂雄 訳, 青土社, 1998年）。

[3] 勿論、その過程で英語自体も多様化していった。

[4] 一方で、「イギリス文学」は“British literature”と表される場合が多い。

[5] アメリカ, カナダ, オーストラリア, ニュージーランド, ケニアや南部アフリカ等の白人文学を指す。

[6] その他、「白人の国」に移住した、肌が白いとは限らない「移民の文学」もしくは「minorityの文学」等があり、複数の国を跨って活動する作家もいたが、ここでは言及しない。

[7] ここでいう「ポスト」とは、明確な起点を持った時間的分類を意図するものではない。

を並べる近代国家となるべく、他国を植民地化した側であるという意識も希薄であることが挙げられよう。

次に、アフリカの文学へと話題を移してみたい。「アフリカにおける文学^[8]」と言い表したときには、大まかに2通りの捉え方があり得る。それは、アフリカ文学をどの学問の領域と考えるか、即ち、「アフリカ民族研究」と「英文学研究」という、異なる学問からの視点に由来している。

そもそも、文字を媒介しない社会ゆえに口承文学 (orature) を伝統としたアフリカ諸地域では、「現代」という限定条件を置かなくとも、文字による文学 (literature) の歴史自体、必然的に浅いと言わざるを得ない。また、一口にアフリカ文学と言っても、その様相は実に多種多様であり、容易く一括りにできるものではない。それは、単純には、アフリカ大陸の地理的な規模の大きさに由来し、各々の文化や歴史的事情の複雑さも、その一助となっている。特に、アフリカにおける文学の特徴の1つは、その極めて入り組んだ言語構造にある。これは、元より多言語状況にあったアフリカ諸国が、ヨーロッパ列強によって植民地支配を受けた結果、宗主国言語の圧倒的優位性がその状況の上に覆い被さったという経緯に、その歴史的根拠を見ることができる^[9]。「アフリカ文学」という学問の様相を定めようと試みたときに残る幾分か曖昧さは、ここに起因するのであろう。そうした経緯から、アフリカ文学は東、西、また南と、地域ごとに異なる道りを経て現在の姿を成し、そのそれぞれが多文化共生の1つの形を示していると言えるのである^[10]。また、口承文学への言及をさて置くこととして^[11]、文字によるブラック・アフリカの文学は、ヨーロッパ由来の言語による文学以前にも存在していた^[12]。加えて、同時期には、アラビア文字の諸言語によるイスラーム文学や、ラテン文字によるキリスト教文学も共存した。「アフリカ文学」の対象を捉えようとするとき、それを「アフリカ民俗研究」の一領域と考えれば、当然、口承文学やこうした民族諸言語も、その範疇に収まるこ

[8] 一般的にアフリカの文学といった場合は、キリスト教圏のサハラ以南 (所謂「ブラック・アフリカ」) の作家や作品を指し、イスラーム教圏であるアラブ地帯のものは含めないのが普通とされている。これらの中には当然、英語のみならず、各地の民族語に加えて、アラビア語やフランス語等による作品が少なからず混在する。

[9] 「アフリカ文学から多文化共生を考える」 p.188, 神田麻衣子, 『未来共生学 4』, 2017年

[10] 神田麻衣子, 前掲論文, p.200

[11] 1960年代から1970年代にかけては、英語圏の批評家たちによって、こうした口承文学をヨーロッパの文字文学に匹敵する精練された芸術伝統であるとして、その野蛮や原始的などといった否定的な表象を振り払おうとする試みも為されてきた (ビル・アッシュクロフト, ヘレン・ティフィン, ガレス・グリフィス 著, 木村茂雄 訳, 前掲書, pp.229-230)。

[12] 1890年前後に編纂されたとされる、ハウサ諸王国 (現在のニジェール南部からナイジェリア北部にかけて存在した都市国家群の総称) の *Kano Chronicle* (邦題『カノ年代記』) を例に、アラビア語で起こされた文学がそれに当たる。

ととなる。このように、「アフリカ文学」は学問の一分野として確かに認識されながらも、その複雑な様相から、統一感のある実体が存在するかどうかについては、必ずしも定かとは言えない。そのこともあってか、特に我が国の未だ英米中心主義が蔓延る「英文学」領域における認識の中では、英語圏ポストコロニアル文学の一翼を担うアフリカ英語文学は「忘れ物」として疎漏され、その豊穡さを胚胎する重要不可欠な要素としては見なされてこなかったのである。

さて、本稿のように、アフリカ英語文学を「広く英語圏に展開する英文学研究」の持ち物として見たとき、アフリカ人が英語で残した最初期の作品としては、Olaudah Equiano（オラウダ・イクイアーノ、1745年-1797年3月31日）の*The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano*（邦題『アフリカ人、イクイアーノの生涯の興味深い物語』、1789年）が挙げられよう^[13]。これは、ナイジェリアで生まれ、幼少期に誘拐されて、奴隷として酷使された著者の自叙伝であり、現代に至るまで、アフリカ英語文学の諸作品に多大な影響を与えている。当作を起点とするアフリカ英語文学は、20世紀初頭になってから、初めて小説の誕生を迎える。南アフリカのSolomon Thekisho Plaatje（ソロモン・チェキソ・プラーキ、1876年10月9日-1932年6月19日）による*Mhudi*（邦題『ムーディ』、1930年）がそれに当たるが、その後、ナイジェリアの作家Chinua Achebe（チヌア・アチェベ、1930年11月16日-2013年3月21日）が残した*Things Fall Apart*（邦題『崩れゆく絆』、1958年）の登場を待つ、ようやく、世界における英語文学の一分野としての第一歩を踏み出したことになる。ところで、文学作品における言語選択は自ずとその読者を限定する訳であるが、アフリカ人作家らにとって英語で書くことの意義は、主に、植民地支配に屈した人々の自尊心を回復することにあつた^[14]。ここに、アフリカ英語文学作品のアイデンティティが形づくられてゆくことになる。そうして、殊に1950年代以降は、次々に独立するアフリカ諸国の状況を反映して、英語によるアフリカ文学作品の隆盛が目覚ましく、植民地とされた時代を経て、激動する政治背景を描いた作品が数多く生み出されていった。その後、2000年にケイン賞（Caine Prize）が創設されたことも、アフリカ英語文学史において大きな進歩であった。これは、「アフリカ人作家」に焦点化されたものであるという点で、ルーツを問わず英語で書く作家全般を対象としたブッカー賞（Man Booker Prize）とは、明確に区別されるものである。

本論の舞台でもある南アフリカに焦点化してみると、特に、前述の「植民地に殖民した白人が書いた英語文学」に当たる白人の英語文学^[15]は、数百年に及ぶ歴史を持っている。その最初

[13] 当作のような自伝を文学作品の1つと見なすことに対しては賛否両論あろうが、ここでは文学の領域をより広義に捉えたい。それは、英文学における多様性、ないしは雑多性を担保する要素に着目し、その可能性を論じようという、本稿の基本的態度による。

[14] 神田麻衣子、前掲論文、p.193

[15] 今では南アフリカの文学史には、様々な民族、英語以外の言語、口承のものも含まれ、文学史の本も複数刊行されている。

期には、探検家や短期滞在者が本国イギリスに報告するような口調の探検記ないし冒険小説が多く見られたが、19世紀末頃から、南アフリカを故郷と見なす白人の国民意識を伴った文学が登場するようになる。その多くは、「白人の国」南アフリカを正当化するような、多分に植民地主義的な物語であったが、一方で、反植民地主義的な作品も少なからず存在し、Olive Schreiner（オリーブ・シュライナー、1855年3月24日 - 1920年12月11日）等はその代表的な作家と言える。やがて、20世紀になり、自治領から（形式上は）独立国となった南アフリカにアパルトヘイト体制（詳しくは後述）が成立すると、その体制を激しく批判する黒人・白人両方の作家^[16]が登場する。本論で扱っているNadine Gordimerは、そういった、アパルトヘイト体制を批判し、そこで白人、即ち支配者として生きることを意味をも厳しく問い直す、白人作家の1人であった。

本論における問題意識の所在は、単にGordimerが学校という存在を作品の中にどのように位置付けたか、それを分析することに終始しない。そうではなくて、それを当時の社会的ないし文化的コンテクストに当てはめて捉えようと試みたとき、本作における学校像がGordimerにとってどのような意味を持ち得たのか、この問いについて1つの可能性を提示しようとするものである。従って、本論では、背景となる南アフリカの社会情勢および教育事情を踏まえながら、主人公Elizabethの息子Boboが通う学校についての描写に沈潜し、本作においては学校がどのような存在として捉えられているのか、また、学校がそうした描かれ方をすることに、果たしてどのような意味があるのか、ということについて考察していく^[17]。

2. Nadine Gordimer その人^[18]

Nadine Gordimerは、1923年11月20日、南アフリカ連邦のジョハネスバーグの東にある鉦山町スプリングスに、ユダヤ系移民の娘として生まれた^[19]。4歳上の姉がおり、両親との4人家

[16] 彼らの作品はときに、検閲による^パ発^シ禁^ン処分を受け、特に、黒人作家となると弾圧を逃れて国外へ亡命することもあった。

[17] なお、以下の本文中に引用される本作の和訳は、『ブルジョワ世界の終わりに アフリカ文学叢書』（ナディン・ゴードイマ 著、福島富士男 訳、スリーエーネットワーク、1994年）から拝借したものである。本論ではそれを、原文と併記する形で示してあるが、そのことによって、原文と翻訳との齟齬が目につく箇所がある。それについては、本文および注において明示し、若干の修正を加えている。

[18] 本項を纏めるのに多くの資料を拝読したが、ここで逐一それを並べ立てることはしない。

[19] 土屋（1992）において、ユダヤ人というルーツからくる抑圧がGordimerに克服すべき戦いを強いた、という指摘がなされているが、これは福島（1992）によって明確に退けられている。当時の南アフリカにおいて、ユダヤ人であることは「白人対黒人」という構図の

族である。父親は、ラトヴィア出身の時計職人、のちに宝石商として家計を支えていた。母親はロンドン生まれで、Gordimerの心臓が生まれつき弱い^[20]ことを酷く心配し、彼女を殆ど学校にやらなかったという^[21]。実際、11歳で退学して以降、Gordimerは学校には通わず、成人後に地元のヴィットヴァテルスラント大学に1年間、聴講生として足を運ぶ程度であった。そうして、自宅で孤独に過ごすことが多かった子ども時代にその淋しさを埋めたのが、読書であった。僅か9歳で、文学を通じた創作活動を始める。彼女の作品が初めて出版されたのは1937年、弱冠15歳のときである。最初は子ども向けの短編で、これが翌年、時事雑誌*Forum*に載ったことから、文壇デビューを果たす。1951年、雑誌*The New Yorker*に短編を発表し、彼女の名は国外でも知られるようになった。彼女の人生にとって大きな転機となったのは、1960年に起きた2つの出来事である。この年、政治的事由によって親友が逮捕され、また、3月21日にはシャープヴィル虐殺(Sharpeville Massacre)^[22]が勃発している。Gordimer自身も、南アフリカの政党である「アフリカ民族会議(ANC)」に加わったが、あくまで一般的な政治問題とは距離を置き、非合法活動には一度も参加しなかったという^[23]。以降、彼女は一貫して差別的な社会制度に反対し、文学という方法を通じて声を上げるべく、健筆を揮い続けた。数多くの白人作家たちが南アフリカから亡命していく中、彼女は頑として国内に留まったという。1960年、短編小説集*Friday's Footprint*(邦題『フライデーの足跡』)を発表。この作品は今日まで、イギリス等で高く評価されているものの1つとされる。1974年に*The Conservationist*(邦題『保護管理人』)でブッカー賞、また、1985年にはネリー・ザックス賞(Nelly Sachs Preis)を受賞。1991年には南アフリカ人として初めてノーベル文学賞(Nobelpriset i litteratur)を受賞しており、生涯を通じて10作の長編小説、200以上の短篇作品を発表し続けた、息の長い作家であった。当時の差別的な社会の欺瞞を、淡々とした機械的な筆致で、かつ諧謔味豊かに告白する作風で知られている。また、自身を評して「現実社会にコミットする作家^[24]」と述べる通り、その冷酷なまでに精緻かつ分析的な手法は、当時の社会に対するリアリ

中に埋もれてしまう、とのことであり、本稿でもこの主張を支持し、彼女がユダヤ人であることについては考慮しない。

[20] このため Gordimer は、ダンサーやジャーナリストといった夢を断念することとなった。

[21] 娘の健康的理由以外に、夫との不和や主治医との恋愛関係が背景にあったとされている。

[22] アパルトヘイト政策を進める南アフリカ政府が1952年に制定したパス法に反発して、解放運動組織「パンアフリカニスト会議(PAC)」が警察署前で行った抗議活動に対して、警察が発砲し、67人が死亡、187人が負傷した事件。同月30日、政府は非常事態を宣言した。4月8日にANCとPACは非合法組織とされ、地下に潜ることとなる。

[23] 「私はANCを支援し、作家の資格において証言してきた、それだけです」との本人談がある(『ナディン・ゴードイマは語る アフリカは誰のものか』p.12, ナディン・ゴードイマ著、高野フミ訳、岩波書店、1993年)。

[24] ナディン・ゴードイマ著、高野フミ訳、前掲書、p.9

ズム文学としての芸術性も高い。南アフリカに新政権が誕生してからは、表現の自由の実現やエイズ防止等に尽力している。2014年7月13日、ジョハネスバーグの自邸にて死去した（享年90）。

3. *The Late Bourgeois World* と時代背景

The Late Bourgeois World（邦題『ブルジョワ世界の終わりに』、1966年）は、南アフリカでは政治的理由から、1963年の「出版娯楽法（The Publications and Entertainments Act）」の規制に基づく検閲の結果、出版後直ぐに発禁処分となった。その後、10年間にわたり封印されてきた作品である。初めに、その大まかな荒筋を示しておきたい。なお、本項の内容は大社（1975）に借りるところが大きい。逐一注は示さないことを予め断っておく。

舞台は、南アフリカ最大の都市、ジョハネスバーグ。30歳になる主人公Elizabeth Van Den Sandtによって、ある1日の出来事が1人称で語られる形式を採る。その主題は、南アフリカに生きる白人リベラリストであるということの意味と、それに伴う葛藤であろう。これは、Gordimer自身が宿命的に背負った課題でもあり、そのために、彼女が描く白人の登場人物は、常にそれと闘う状況に配置される。さて、医学研究所で生計を立てる彼女は、恋人である弁護士Grahamと朝食中、友人からの電報によって元夫Maxの死を知る。小さい町の小店主の娘であったElizabethと違い、彼は名家出身の白人ながら、「アフリカ抵抗運動（ARM）^[25]」という組織に身を置き、反社会的活動に従事していた。サボタージュ運動の初期段階で逮捕され、裁判にかけている。その後、結婚生活、就職とも行き詰った末に、自殺という道を選び、車もろとも海に身を投げたのであった。物語を通じて、Elizabethや、Maxが彼女との間に遺した息子のBobo、Graham、認知症を患う彼女の祖母、Maxの両親や妹夫妻、そして運搬請負人の黒人Lukeが、各々の場面でMaxのことを回想しながら、当時の南アフリカで革命に関わる1人の白人の挑戦的意欲（結果的には、革命家としても、父としても、また夫としても失格者であったが^[26]）を浮き彫りにしていく。

本作が背景とする1960年代前半^[27]の南アフリカは、厳しい人種差別的弾圧の最中にあり、それを具現化する法律が矢継ぎ早に制定された時期であった。この、世にいう「アパルトヘイト（apartheid^[28]）」は、1913年の「原住民土地法（Natives Land Act）」に始まり、特に1948

[25] 後に消滅した白人青年組織であり、ANCのような運動の主流ではなかった。

[26] Maxのこうした姿は、同じくGordimerの小説である*Burger's Daughter*（邦題『バーガーの娘』、1979年）に登場する白人の父Lionel Burgerのそれとは、およそ対照的である。

[27] Gordimerの小説中での出来事が起きる時期は、ほぼそれが書き表されようとする時期と重なっている。

[28] アフリカーンス語で「隔離」の意。この言葉自体は1917年に登場し、その後、1930年代

年の国民党 (National Party) ^[29] 政権誕生以来、明確に強化されていった。基幹法と細則等を合わせると、実に300を超える洪大な法体系を為し、1991年に廃止されるまで、20世紀の南アフリカ史の大部分を占めた。南アフリカに進出した白人と、そこに原住していた有色人種とでは、異なった文化や伝統を持っているのであるから、各々が別々に発展しよう、という趣旨で打ち出されたものである。ところが、実際には、植民地支配を背景に有色人種を抑圧するための、白人優位の差別的な政策であった。当時人口の8割近くを占めていた有色人種を、国土全体の13%^[30]に当たる不毛な土地へと強制移住させるばかりでなく、公共機関は全て、白人と有色人種で分けられた。さらに、異人種間の結婚はおろか恋愛も禁止され、労働^[31]、医療に至るまで徹底的に差別を受け、艱難辛苦を強いられることとなった。その結果として出来上がったのは、典型的な植民地と言うよりもむしろ、植民地社会を保とうと執着して独自の歪みを生じさせた社会であったと言える。こうした現状に、有色人種のみならず一部の白人たちも組織的な抵抗運動を激しく示したが、政府は法律によって、そのような動きを厳しく弾圧した。これにより、テロ活動や投獄、令状無しでの逮捕、拷問等が日常化し、多くの犠牲者を出した。

当然、それは教育においても例外ではなかった。1953年以降、アパルトヘイト政策の要の1つであった「バンツー教育法 (The Bantu Education Act) ^[32]」という法律が存在した (施行は2年後の1955年)。かつての黒人教育はミッション・スクールに委ねられており、教育内容も統一されたものではなかったが、同法はこうした黒人の教育システムを破壊し、徹底的な国家管理体制の下に置くこととなった。これを基にして、白人のための教育と黒人のための教育を分ける差別教育が運用された訳であるが、このシステムが有効に機能したことこそ、アパルトヘイト体制の長期的支配を可能にしたのである^[33]。同法の目的は、1つには、低賃金で資本主義経済に奉仕する半熟練労働者を供給するためであり、そして、もう1つには、白人が優秀で黒人が劣等であるとするアパルトヘイト体制を自然に受け入れるよう、子どもを社会化するためであった^[34]。これにより、白人の子どもに対する教育は先進国のそれと同水準とまでされた

にアフリカーナーの政治家や知識人らが使い始めた用語である。

^[29] ボーア人と呼ばれるオランダ系移民の子孫が中核となって組織されていた。

^[30] 前述の原住民土地法導入当初は8%とされており、1936年に同値まで緩和されたが、依然として著しく不平等な状況であることに変わりはない。

^[31] 当時、有色人種の人々の給料は、白人たちの実に10分の1程度であったとされている。

^[32] 「バンツー (Bantu)」とは、東から南部のアフリカにかけて分布した黒人を指す言葉で、本来は「人」の意。なお、同法は後に、1996年に新政府による「南アフリカ共和国学校法 (South African Schools Act)」の制定で廃止されるまで、社会の圧力に柔軟な対応を見せながら変化し、40年余りにわたって存在した。

^[33] 『アパルトヘイト教育史』 p.12, ジョナサン・ヘイスロップ 著, 山本忠行 訳, 春風社, 2004年

^[34] 「南アフリカにおける教育開発—ジェンダーの視点から—」 p.97, 大津和子, 『国際教育協

一方で、黒人は教育を受けるに値しない存在として義務教育制度の対象外とされ、多様な年齢の者たちが一堂に会して、過密な教室で座学を受けた。また、教育施設は、教科書、職員室、図書館を備えていなかった。国家が割り当てる教育予算も、黒人は白人の10分の1程度であり^[35]、従って、彼らは経済的、政治的自立のために必要な知識や技能を育成する機会を与えられなかった。現に、1978年の統計時点で、学校に通うアフリカ人の子どもは白人のその約5倍もいたが、そのうちで大学入学資格試験（Matric）もしくはそれと同等の試験に合格したアフリカ人は、白人の3分の1程度に留まっている^[36]（こうした教育は黒人層の不満を鬱積させることになり、1976年のソウェト蜂起（Soweto uprising）^[37]に繋がった）。かくして、不当な政治的支配によって、黒人を無条件に否定する価値観を育てる機関としての学校が誕生することとなるのである。そこには過度に守られた異様な空間があり、大半の子どもは無条件に、そこでの洗脳的教育を受け入れる。その意味で、学校は、社会の縮図という以上に、厄介で危険な思想に満ちた場所と言える。

4. Elizabethに見る「学校」像

Gordimerは、自身と同様、白人女性にとってのアパルトヘイトとは如何なるものなのかを、歴史の流れにおける1人の人間を通して詳らかにしようとする。本作品においてその役割を与えられたのが、主人公のElizabethである。彼女はGordimerが描く結婚の困難さ^[38]の体現者であり、即ち、夫Maxが社会にかかわる責任の領域で変化していく一方、置き去りを食ってしまった立場であった。また、彼女は経済的に夫を支え、同志のアフリカ人活動家を支え、息子を育て、祖母を気遣い、その上で、再び闘争に協力しようとするが、その様子は、どこか夫を超えていくようにも思える。夫のある意味で破滅的な生き方は、対照的に、子を抱える母親としての彼女の現実主義的な内面を強調する。まずは、彼女の視点から語られる「学校」像について考えてみたい。

力論集3』, 2000年

[35] アフリカ人教育への支出は1300万ラントとされ、これは1972年まで全く増額されなかった。また、その額以上の経費は、アフリカ人に対する納税額の増加によって賄われた。

[36] 『南アフリカの歴史 最新版』p.348, レナード・トンプソン 著, 宮本正興, 吉國恒雄, 峯陽一, 鶴見直城 訳, 明石書店, 2009年

[37] アフリカ系学生のデモ行進に警官隊が発砲し、最終的に、死者176人、負傷者1139人、逮捕者1298人（警察発表による）を出した。この前代未聞の大惨事は、一般的には、学校において白人支配の象徴とされたアフリカーンス語の必修化に対する不満によるものとされているが、実際には、差別的な教育制度そのものに対する不満が原因と考えられる。

[38] Gordimer自身も一度、離婚を経験している。

当時、白人の中流以上の層は、子どもを学費の高い、英語の寄宿学校に送るのが普通であった。これらの学校は、イギリスのパブリックスクールに倣ったもので、そのため、しばしば“Little England”と表現されることがある。Elizabethもまた、息子Boboを寄宿学校に通わせており、その理由は作中、次のように語られている。

“For the truth is that I would hold on to Bobo, if I let myself. I could keep him clamped to my belly like one of those female baboons who carry their young clinging beneath their bodies. And I would never let go.” (p.8)

(ほんとは、もしも自分に甘えを許したら、わたしはかれにべったりしがみついて離れられなくなると思ったからだ。そうやって、牝のヒヒたちが子どもを身体の下にぴったりとくっつけて歩くように、わたしはかれをお腹にしがみつかせたままにいるだろう。そうになったら、わたしはぜったいに手放さないだろう。) (p.14)

このように、彼女は、自分が息子に依存しないようにと彼を学校にやり、そうでもしなければ、「ヒヒのように」我が子を離そうとしないことを自覚していた。ヒヒは、南アフリカでは非常に馴染みのある動物であり、母の愛情や乳離れしない子どもを表すのに用いられる、ストック・フレーズであるらしい^[39]。彼女にとって1人息子であるBoboは、母親として必然の心理であろうか、それほどまでに溺愛してしまう存在なのである。恐らくは、本作の執筆時、既に2子を得ているGordimer自身の母性的感覚を反映した表現とも取れよう^[40]。こうした親子の異常なまでの愛着は、Gordimerが長く意識的であり続けたテーマの1つでもあった。まず、ここに確認されるのは、Elizabethが（寄宿）学校という機関にアプローチする動機の発端が、第一義的には彼女自身の側にあったということである。この時点で、我が子の成長に寄与する教育的要素を期待している様子は無く、学校はあくまで、自分と我が子を隔てるための、「仕切り」のような役割を担う。彼女は、この合理的自己拘束ともいえる行動の一方で、彼をその学校に送り込んだことに対して、ある種の負い目を感じ、葛藤している。そこで、定期的に彼に「プレゼント」を贈ることで、それを埋め合わせようとするのである。

“Anyway, I’m the one for whom it is necessary to have presents for Bobo. I see this in his face when I anxiously lay out my carriers of apples and packets of sweets. I know that it is my way of trying to make up for sending him to that place – the school.” (p.8)
(とにかく、わたしは、手ぶらでボボを訪ねてはならない、ただ一人の人間なのだ。この

[39] ナディン・ゴードイマ 著、福島富士男 訳、前掲書、p.190

[40] 先に引用した対談では、作品を書いているときに女であるという意識があるかどうかについて明確に否定しているが、一方で「私も子どもをもっていますので母親の存在についてはよくわかっています。私が十分こなせる題材だと思っています」とも認めている。

ことは、気に入ってもらえるかとはらはらしながら、わたしがリングやお菓子の包みの入った買い物袋を広げるときの、かれの顔つきを見ればはっきりとわかる。もちろん、それが、かれをそんな場所に—その学校に—送り込んだことに対する、わたしなりのつぐないの仕方だというのは、自分でもわかっている。) (p.14)

ここには、母親という立場から生じる責任感も認められよう。まして、父親不在となれば尚更のことである。そして、この「申し訳無さ」は、彼女によって語られる学校の様相に強く表れている。

“The school has very large grounds with a small dam and a plantation of eucalyptus trees – that was one of the reasons why I chose it: so that he would have somewhere that at least he could pretend was wild, to get away from playing fields and corridors.” (pp.10-11)

(学校には大変広い運動場がいくつもあり、さらに、小さな堰と、植林されたユーカリの森があった—それが、じつは、わたしがこの学校を選んだ理由の一つだった。そこでなら、すくなくとも、本物の自然のなかにいる気分ひたれる場所をかれは見つけるだろうし、そうすれば、校庭や廊下での遊びから逃れることができるだろう。) (p.17)

このように、彼女がBoboをその学校に通わせている理由は、先の合理的自己拘束についても同様であるが、間違いなく、そこで行なわれる教育の外にあった。彼女は、息子を本物の自然の中に置くことを選んでいる。教育機器や教師陣、カリキュラムといった学校教育範疇の環境に魅力を感じたという訳ではなく、むしろ、そうした要素から「避難できる場所」としての自然が存在することこそ、まさしく彼女がその学校を選んだ理由であった。主人公Elizabethの、ひいては同様に白人女性として生きる筆者Gordimer自身の、当時の学校教育に対する期待感の無さ、さらに言えば、嫌悪感を反映していると図るに十分である。この動機は、恐らく、同じくその学校に通う「高級住宅地の家の子弟」の親たちのそれとは、一線を画すものであろう。彼女は、学校という枠組みから息子が離れることのできる要素を求めている。「高級住宅地の家の子弟」の親たちが一体どのような動機でその学校に我が子を通わせているのかについては明らかではないが、こうした彼女の思想は、本作の登場人物の中では、かなり独特なものとして浮き彫りにされている。

Boboを通わせている学校の物理的様相は、彼女独特の視点で何か異質なものを写し取るように、実に細かに描写されている。

“The buildings (and the gateposts with their iron arch bearing the school crest, and name in Celtic lettering) are of yellow brick that breaks out in crosses, raised like

Braille bumps, all over the place.” (p.11)

(建物（さらに、鉄のアーチがかかった門柱、その上の校章、ケルト式の飾り文字の校名）は黄色いレンガ造りで、そのレンガはいくつもの十文字を突き出し、いたるところで点字の点のように盛り上がっていた。）(p.18)

来校者はこのアーチの「下をくぐって」校内に入ることになる、というのが巧妙であり、そこには、支配的な意味合いを感知することができる。「鉄」という材質は、いかにも人工物らしく、先の自然のイメージとはおよそ対照的である。さらに、鉄は古くから武器を作るための材料とされており、また、その錆は鈍くくすんだ血の色を思わせる等、強固で暴力的な印象を浮かばせる。英語“iron”が「冷酷な」という意味を持ち合わせることもまた、暗示的である。その上には、当時の宗主国イギリスを想起させるケルト文字が乗り、組まれたレンガが主張する十文字は、キリストを暗示しているようにも思える。その無機質で冷たい印象は、学校へ向かう道中の穏やかで暖かく、匂いまで感じられるような表現ともまた、まるで真反対な存在感を読者に植え付けている。

“The road to the school leads away from the hilly ridges of Johannesburg and soon strikes out straight through the mealie fields and flat highveld of the plain. … calm steady sunlight that make the few trees look black against the pale grass. All that was left of the frost overnight was the fresh smell. There was an old pepper tree here and there, … eucalyptus with tattered curls of bark, twiggy acacias, … a yellowing willow beside a crack in the earth.” (p.5)

(学校へいく道は、ジョハネスバーグの小高い尾根を抜けると、やがて平原のトウモロコシ畑と平らなハイフェルトのなかをまっすぐにのびていく。……おだやかで落ちついた陽光を浴びて、まばらな木々が色のない草の広がりなかに黒く見える。昨夜の霜が、名残惜しげに、いまは真新しい匂いとなって当たりに漂っている。コショウの老木がぽつんとそこそこに見られたが、……ユーカリの幹は皮が巻くように剥がれかかり、枝だけになったアカシアの向こうには、……黄ばみかけた柳の木が一本。そのそばの地面を裂け目が走っている。) (p.10)

このように、語り手の視点が移動しながら描写が続いていく文体は、福島（1999）が「移動するテキスト^[41]」と指摘するように、Gordimer作品鑑賞の醍醐味の1つと言える。この一定の方向性を持った移動、すなわち、カラー・バーの向こう側へと越えていこうとする試みは、そうすることによって、アパルトヘイト下の歪んだ社会に反対する白人作家としてのGordimer

[41] 『アフリカ文学叢書・別巻 アフリカ文学読みはじめ』p.190, 福島富士男, スリーエーネットワーク, 1999年

自身が、南アフリカという土地に自らの存在基盤を求めて生き延びようとする術でもあろう。かくして、Elizabethは車を走らせながらMaxとの過去を回想する訳であるが、道中の風景描写に得られる安心感は、「まばら」で、「そこここに見ら」れ、皮が「剥がれかか」ったり、「枝だけにな」ったり、「黄ばみか」け、「裂け目が走」る等、在るがままの自然が持つ不完全さにこそ、求めることができる。

さて、彼女は学校を見ると、“produces a subdued and cowed mood in me” (p.11) (どこか押さえつけられたような、おどおどした気分にな) (p.18) ってしまう。校門を潜った途端、“go on mental tiptoe” (p.11) (つま先立ちにな^[42]) (p.18) って歩く彼女の様子からは、学校というものがどこか権威的で、近付き難い存在であると捉えられているように感じられる。学校施設の描写はまた、その不自然で、かつ異常なまでに規則的な印象を浮き彫りにする。

“in the grounds trimming the hedges at sharp right angles and digging round the formal beds and clipped shrubs” (p.11)

(校庭の垣根をきちっと測ったような角度に切り揃え、型どおりの花壇の周囲を掘ったり、灌木の剪定をしたりしている) (p.18)

“I went up the polished steps and dropped the heavy knocker on the big oiled door.” (p.12)

(わたしは、磨き上げられたステップをのぼって、その重いノッカーを、ワックスで磨きあげられた大きなドアに打ちおろした。) (pp.18-19)

“the formal, deserted front garden”

(型どおりに設計された正面の庭に、人影はなかった) (p.25)

これらの表現は、まさしく人を型に押し込めるような規則性を彷彿とさせるが、ここには、その学校という存在に対して彼女が抱く反発や違和感、気味の悪さのようなものを窺い知ることができる。他に、“hostilely clean” (p.12) (反発したくなるほど清潔^[43]) (p.19) な校長の研究室、“in the standard concession to comfort” (p.12) (何とか心持よくするため) (p.19) のカーペット、といった描写も、彼女の心情をよく反映しており、彼女が“how like a prison it was! … clean and ugly” (p.11) (どうしてこんなにも刑務所とよく似ているんだろう！清潔で、醜い) (p.18) と表現するのも無理はない。まさしく、彼女に息子をそのような場所に送り込んだことへの負い目を感じさせるに、十分過ぎるほどである。加えて、こうした状態を維持する労働力は、ほぼ間違いなく、(白人ではなくて) 黒人であることを忘れてはなるまい。とこ

[42] 敵密には、「つま先立ちで歩きたくなるような心持にな」の意。

[43] 敵密には、「敵意を持っているかのように清潔」の意。

ろが、上記の描写には、彼らの姿が一切感知されない。あえて名を与えるとすれば、こうした「不在の描写」からは、白人の子どもを社会化する体制の維持のために、黒人が強制的に下部組織に組み込まれているにもかかわらず、白人社会においては、彼らが見えない存在として扱われていることが読み取れる。

実は、このような学校像は、彼女の生い立ちにも深く関係している。それを示すために、彼女が1963年に残したエッセイ「脱走者と永遠に輝ける夏」の一部を紹介したい。

「……私は歩いて醜い鉄の門扉を押し開いては外に出たものだ。そして昼までずっと広々とした草原^{フェルト}でひとり遊んでいた。^[44]」

「通学生として通った修道会の学校でさえ、壁もカーベットも床磨き粉の臭いも、それから生徒全員が同じでなければならないといううっとうしさも、鐘の音で仕切られた有無を言わせぬ時間も、そのいずれもが私の中に反抗心と嫌悪感を引き起こしたのだから。^[45]」

こうして、1つには、白人であるElizabethによって、本作における学校が、抑圧的で何か不気味な力を帯びた、居心地の悪く、好ましくないものとして捉えられていることが分かるだろう。

その一方で、彼女が寄宿学校の校長の様子を観察して述べる表現からは、本作における学校の、もう1つ重要な性格が浮かび上がってくる。彼女は、校長を前にして“idiotically timid” (p.14) (まぬけなほど臆病になってしまう) (p.21) くせに、彼の心の動きを冷静に分析してみせたりもする。彼女いわく“no doubt the poor devil” (p.13) (うたがいがなく、情けないほど小心な男) (p.20) である校長^[46]は、“dreads parent’s problem” (p.13) (親たちが持ち出しかねない問題を酷く恐れ) (p.20) ながらも、見事に“according to the manual” (p.13) (マニュアル通り) (p.20) の対応を見せている。“with its glaze of artificial attentiveness” (p.13) (うわべだけ熱心に聞き入っ) (p.20) ているような態度を取り、父親の件は親子で解決しろと言わんばかりに、そそくさとElizabeth・Bobo親子を来客応接室に仕舞い込んでしまおうとする姿からは、彼の事勿れ主義、また保守的とも言える様子が見て取れる。また、彼女の敏感な嗅覚を以って“there was certainty of his distance from people like us” (p.13) (かれがわたしたちのような人間とはまったくちがうと確信している) (p.20) のが分かるというのだから、彼もまた、安易に人を縦の関係性の上に並べてしまうような、差別的で短絡的な考えの持ち主な

[44] 『いつか月曜日に、きっと』 p.80, ナディン・ゴードイマ 著, スティーヴン・クリングマン 編, 福島富士男 訳, みすず書房, 2005年

[45] ナディン・ゴードイマ 著, スティーヴン・クリングマン 編, 福島富士男 訳, 前掲書, p.82

[46] Elizabethは作中、副校長についても同様に, “powerful but helpless” (p.12) (力がつよそうで、どこか頼りな) (p.19) かった, と述べている。

のであろうか。否、彼ら教師もまた、政府によってそのような倫理観を持つよう教育されたのであり、そういった意味で、アパルトヘイト政策の下で抑圧された存在と言って然るべきかも知れない。

実際のところ、本作における校長の描写は、Elizabethの視点を通じて、当時の教育行政の在りようを忠実に体现している。先に紹介したバンツァー教育法下において、教員の養成機関は、教育委員会を束ねる原住民問題省が完全に掌握していた^[47]。彼らは何よりも分離教育の原則に基づいて、結果的にアパルトヘイトの共犯者となることを強いられたのである。教育職における専門性は否定され、さらに言論の自由を奪われて、教育は単なる政治の道具と成り果てた。法的抗議権は与えられず、その任用も縁故や賄賂等による打算的なものであった^[48]し、恣意的にパージされることもあった。

このような校長や、先に挙げた「高級住宅地の家の子弟」の親たちに対して、“didn't just eat and sleep and pat himself on the back” (p.19) (ただ食って、寝て、自己満足しているだけの人間じゃなかった) (p.27), “wasn't content to leave bad things the way they are” (いまのような悪い状況がこのままつづくことに耐えられなかった) (p.27) という、“the courage even to fail at trying to change it” (p.19) (世の中を変えようとして失敗する勇氣) (p.28) を持った夫Maxの姿は、Gordimerが用意する「ほんとうに革命的な勇敢な人びと^[49]」の象徴として対照的な存在であり、読者に鮮烈な印象を残している。従って、逆に言えば、この対比的構造に、当時の社会に対する学校という場所の無力さが暗示されていると理解することができよう。情けなくも無抵抗に政治の不当な支配に服した学校の姿には、それが本来持ち得るはずの社会を変えていく力、未来を創造していくだけの力の存在は、全く感じられないと言ってよい。ここにおいて、読者に求められるのは、この醜怪な社会制度の根深さを認識し、彼ら教師もまた被害者であるという眼差しを向ける態度にある。

こうして期待されるべき力を失った学校像は、Gordimer自身の中に巣食うものでもある。それを示すために、次の発言に注目したい。

「文学を読む人が減ってくるということは残念だと思います。これは学校教育だけでは直せません。……学校は頼りになりません。よく私に向かって、あなたの小説が何々大学で研究対象になっていると教えてくれる人がいますが、私はやれやれと思うのです。大学で研究されることは、あまりめでたいこととは思いません。^[50]」

[47] 「南アフリカのアフリカ人教育—「人種差別と教育」研究への一過程—」 p.107, 柿沼秀雄, 『首都大学東京人文学報 教育学 7』, 1971年

[48] 柿沼秀雄, 前掲論文, p.108

[49] ナディン・ゴードイマ 著, 高野フミ 訳, 前掲書, p.22

[50] ナディン・ゴードイマ 著, 高野フミ 訳, 前掲書, pp.50-51

これは対談当時、電子メディア^[51]の登場によって文学が死んだと批評されることに対するものである。その復興を学校教育には託せないという思いは、彼女の生い立ちや当時の社会背景が形づくった学校像を反映していると見える。この時、既に、*The Late Bourgeois World*の発表からは20余年を過ぎている。学校教育の持つべき力に対する根深い不信感は、謂わば桎梏の如くGordimerに憑り付いており、彼女自身が不正制度の被害者であることの証明と言えよう。

これまで見てきたように、本作において学校は、人々に対して抑圧的で不気味な力を帯びた権威的存在であると同時に、一方で、社会の変革に対して無力であり、当時の政治的意図を無抵抗に反映した存在として描かれている。この作品における学校には、思想的には、まさしく社会の縮図が存在しており、それは言うまでも無く、当時の不平等極まりない社会を、映し鏡として体現していたのである。バンツール教育法下における教育的問題を論じる上で強調されがちなのは、黒人に与えられた教育が如何に粗末で、また洗脳的なものであったか、ということ一点であった。ところが、当時の教育概念を形づくっていた同法の目的は、国家として黒人に劣悪な教育環境を提供することだけに留まらない。即ち、黒人に対しては差別的である一方、白人にとって不偏不党、というようには当然ならなかった。従って、白人のための教育にも人種差別の精神が色濃く反映され、現に、原住民教育特別委員会報告の中で述べられた教育原則には、「白人児童の教育は支配者の社会での生活を準備^[52]」するものと掲げられていた。Elizabethの視点はここにおいて警鐘を鳴らし、白人教育における異常事態を読者に知らしめるのである。

5. Boboに見る「学校」像

Gordimerの作品に1つ特徴的なのは、与えられた場面に対して複数の視点を導入し、当時の病的とも言える社会状況を、より多角的に分析する点である。それが彼女にとって、「その話を進める正しい方法^[53]」なのであろう。この作品においても、その学校像を浮き彫りにするのは、Elizabethの視点だけに限定されない。それは、学校に通う息子Boboの言動の中にも効果的に現出され、その意味でも彼は、物語の中で実に重要な役割を担っていると言える。そもそも、Boboの存在が無ければ、学校自体が作品に登場することも無さそうだが、本作における彼の存在意義は、それだけに留まらないのである。

まず触れておきたいのが、面会に来たElizabethに合わせるため、校長がBoboのことを指して、生徒に“Bruce Van Den Sandt” (p.13) と、その名を告げる場面である。

[51] ここでの電子メディアとは、テレビのことを指している。

[52] 柿沼秀雄、前掲論文、p.92

[53] ナディン・ゴードイマ 著、高野フミ 訳、前掲書、p.32

“I hardly ever hear the name spoken. This is the other Bobo, whom I will never know. Yet it always pleases me to hear it; a person in his own right, complete, conjured up in himself.” (p.14)

(わたしはその名が口にされるのをめったに聞いたことがなかった。これは、ボボのもう一つの姿なのだが、それについてわたしはなにも知らない。しかしそれを聞くと、いつでも、わたしはうれしくなった。非の打ちどころのない一人前の男になったかれの姿が、すぐに連想されてしまうのだ。) (p.21)

校長が口にしたのは、Maxの名前である。作中、間違いなく、Boboは亡き父の影を纏って、可能性の象徴としての役割を持っている。しかも、注目すべきは、それが学校とは対比的な存在として描かれていることである。彼は凶らずも、ある種のヒーロー像を体現することとなる。かくして、“this shut-up parlour” (p.14) (この密閉された居間) (p.22) の中に躍り出た息子は、その存在感を如何無く発揮する。

“The high note of this energy might, like a certain pitch in music, have silently shattered the empty vase and the glass on the engravings of Cape scenes.” (p.14)

(そこまで高められたエネルギーからは、いまにも音楽のある音程と同じような震動が生じて、部屋のなかの空っぽの花瓶や、ケープ地方の美しい風景のレリーフをおおったガラスを、音もなくこなごなに砕いてしまいそうな気がした。) (p.22)

部屋に入るや否や、“Ma? Well” (p.14) (母さんか、なんだ) (p.22) とあつけらかんとしてしまう息子は、未だ自分の秘める力に気付いてはいない。学校という枠を打ち砕くその力は、あくまで音楽のように心地よく、秩序を持ち、そして暴力的でない。この部屋にいると“so chicken” (p.17) (ビクビク) (p.25) し、“don't know how you'd manage” (p.17) (どうしていいか分からなくなっ) (p.25) てしまう母は、持ち合わせていない力である。“recognize … suffering” (p.18) (苦しみを知) (p.26) り、そして、その“alleviate suffering” (p.18) (苦しみを軽減し) (p.26) なければならないという宿命を受け継いだ者の強さであろうか。こうしてElizabethは、“Bobo has mastered everything; that place has no terrors for him” (p.17) (ボボは全てを征服している。この場所のはかれにはなんの恐怖も与えていない) (p.25) として、ある意味でBoboの勝利を確信するのである。多少なり、学校に送り込んだElizabethの罪悪感を和らげたものと思われる。

また、彼がある友達との出来事について、Elizabethにこう述懐する。

“he's always talking about “munts” and things – and when we get hot after soccer he

says we smell like kaffirs. Then when I get fed up he thinks it's because I'm offended at him saying *I'm* like a kaffir – he just doesn't understand that it's not that at all. … He doesn't understand. There's nothing wrong in it, to him.” (pp.21-22, 斜字原文まま)
(あいつ、変なことばかりいうんだよ^[54] —それに、サッカーで、汗だくになったりすると、あいつ、ぼくらがカファーみたいに臭うなんていうんだよ。それで、ぼくがうんざりしていると、あいつったら、カファーみたいだっていったんで、ぼくが怒っているって思ってるんだから—ほんとになんにもわかってないんだ。……わからないんだね。それが悪いことだなんてすこしも思わないんだよ。あいつは。) (p.31)

作中、Gordimerは、Boboの周囲を取り巻く生徒たちに、アフリカ人のことを「カファー(Kaffir)^[55]」と呼ばせている。ところが、Bobo一人にあっては、先に整理したような白人至上社会を体現する学校の中に身を置きながら、自らの周囲を毅然として批判する。彼がそのような態度を取るのには、他でもなく、周囲が“calling them kaffirs” (p.22) (かれらのことをカファーって呼ぶこと) (p.31) であり、“talking as if they were the only ones who ever smell” (p.22) (まるでかれらだけが臭うなんて話し方すること) (p.31) である。それに対して彼は、“can't stand” (p.22) (耐えられない) (p.31) とまでの強烈な感情を表明している。Boboの正義感の強さの裏に、一層父親の影を思わせる。さらに、彼は続ける。

“Nearly all the boys are like that. You get to like them a hell of a lot, and then they say things. You just have to keep quiet.” (p.22)
(この生徒はほとんどみんなそうだよ。あいつらとめちやくちゃ仲良しになれば、どっさりしゃべってくれるよ^[56]。こっちはただ黙って聞いていなくちゃならないけどね。) (p.31)

ここにおいて、Boboは、「みんな」との真の友情関係を放棄しているのであろう。こう述べるBoboは、“his face…looking for an answer but knowing, already, there wasn't one” (p.22) (なにか答えを求めているようで、それでも、そんな答えはどこにもないことをすでに知っている顔) (p.31) をしている。その禁欲的な表情は、学校という場所で押し殺すべき感情を得

[54] 厳密には、「あいつ、いつも「黒んぼ」とかそんなことばかりいうんだよ」の意。“munt”にはしばしば「黒んぼ」という日本語が与えられるが、これはアフリカ黒人の蔑称である。

[55] アフリカ黒人を指す蔑称。語源はアラビア語の「カフィール(Kafir)」で、元はイスラーム教徒から見た異教徒を意味する。のちにバントゥー系アフリカ人を指して使う差別用語として、白人の間に広まっていった。

[56] 厳密には、「あいつらのことめちやくちゃ好きになるんだけど、そうするとあいつら、ああいうこと言うんだよ」の意。

た結果であろうか、母の罪悪感を再び呼び起こした、と想像するに難くない。ところが、Boboは、こう漏らすのである。

“Sometimes I wish we were like other people” (p.22)

(ときどき思うことがあるよ、ぼくもほかの連中と同じだったらいいのになあって) (p.31)

「ぼくも」という訳が与えられているが、“we”を主語に用いていることには目を留めるべきである。そこにはBobo自身の他に、目の前にいるElizabethと、あるいは亡き父Maxも含まれようか。「みんな」との真の友情関係を放棄する一方で、彼が抱く連帯意識、さらには、特別感を認めることができる。そして、ここで言う「いいのに」とは、一体どういった心情の表れと取るべきか。勿論、多少の単純な羨望こそあろう。しかし同時に、さすがは、革命家Maxの息子である。彼らほど盲目かつ傲慢であることができれば、生まれ持った立場がもたらす決定的な違いを無条件に享受する無神経さがあれば、そこにはむしろ、周囲に対するある種の優越感、ひいては軽蔑の心情さえ認めることができる。また、Boboの心理に映し出されるこうした感情を、生物学的観点から構図化しようとするならば、次のような対立構造として整理することができる。即ち、「肌の色による差別を相続するBoboの周囲」に対して、「自らの生い立ちによって確立された彼のスタンスから投げ掛けられる、その優越的感情」が、「先天的獲得物」に対する「後天的なそれ」の勝利を意味し、取りも直さず、社会を変え得る力の存在を暗示しているようにも思えてならないのである。既に反アパルトヘイト勢力は殆ど身動きがとれなくなっていた時代の中にあって、本作の主題にもなっている、白人社会の終わり（それは同時に、新たな社会の幕開けを意味する）、ひいては社会変革の可能性を、学校や彼の周囲に対するBoboの姿に見いだすことも、決して間違いと捨て置かれるものではあるまい。

如何にしても、我が子のふとした子どもらしさは、Elizabethに幾何かの安堵と落ち着きを与えたに違いない。彼女はそれを直感的に捉えたのか、逃すまいとして、愛おしそうに引き出している。

“I said, ‘What people?’

‘They don’t care’

‘I know’. In full view of blank school buildings we exchanged the … cheek-kiss”

(わたしがいった。「どんな連中?」

「なんにも考えない連中だよ」

「わかるわよ」無表情の校舎を見渡して、わたしたちは頬にキスをした) (p.31)

このように、子どもらしさを保ちながらも、どこか冷静なBoboと周囲との距離を感じたElizabethは、Boboに対する“an unreasonable confidence” (p.22) (過剰なほどの確信) (p.32)

を得る。そして、自分に言い聞かせるように、こう繰り返すのである。

“He is all right. He will be all right.

In spite of everything.” (p.22)

(かれは大丈夫だ。これからも大丈夫だろう。

どんなことがあるうとも。) (p.32)

こうした息子の遅しさには、今は亡きMaxの影が確かに存在する。母と別れ、構内へと戻っていくBoboは、学校に着せられた「ブレザー」の下に“the bulge buttoned” (p.22) (押しこめられた胴体) (p.31) が抑圧的な印象を与え、それに対して、彼の“feet flying” (p.22) (舞うような足) (p.31) は、大いなる可能性の象徴として、未来への頼もしささえ感じられるのである。

ところが、本作におけるBoboの役割は、そう単純に希望一色とはいかないように思う。というのも、畢竟、彼は少なくとも、学校の雰囲気には適応してしまっているのである。そうであるからこそ、学校にあって母のようにも委縮せず、周囲と一応には「めちゃくちゃ仲良し」にもなれる。先に触れた「いいのに」という発言が孕む二面性にも、今一度、立ち返らなければならない。ここに、それらが単に子どもながらの柔軟性の高さ故のものなのか、それとも、白人であるということの限界を示しているのか、という問題が浮上する。もし、後者の意図があるとするならば、Gordimerは極めて現実主義的な視点を用意していたと言えよう。妥協を撥ね付け、詳細を極める分析からは、白人として生きるGordimer自身も逃れられない。彼女のこうしたスタンスは、次の2つの発言においても表明されている。

「私のように、南アフリカのような状況の中に生まれ育てば、まず、あらゆる種類の先入観、自分と皮膚の色が違の違う人に対する偏見等を相続してしまいます。皮膚の色が違うというだけで差別する。そういうことが否応なしに自分の中に入ってきてしまうのです。^[57]」

「どんな作家も、自分のいる社会に対してどれほど反対意見を表明していたところで、その生の条件、その環境、その文化に影響されているものです。^[58]」

揺るぎ無く、よもや転覆不可能にさえ見える当時の歪んだ倫理観への、少なからぬ恐れか。そこには、変革の期待さえ望めない空虚感も漂っている。はたまた、そこに立ち向かおうとする

^[57] ナディン・ゴードイマ 著、高野フミ 訳、前掲書、p.11

^[58] 「海外文化ニュース ゴードイマ、自身を語る」p.91、ナディン・ゴードイマ、『みすず 38 (7)』、1996年

Gordimerの決意の表れもあろうか。Boboという人格が内包する不安定さの中には、その双方が交互に折り重なる、非常に入り組んだ感情を読み解くことができる。物語の形式上、Boboの独自性は常に母の眼鏡を通じて読者に確認されるのみであり、Elizabethの知らない彼の「もうひとつの姿」は詳らかにされない。そこには、一抹の危うさも感じられるようである。父Maxの死を聞かされ、それを受け入れようとする彼の姿に、Elizabethはこう思い至る。

“At times I’m uneasy to see how sceptically he reports what he is told by others. … He’ll tear me down. … but one generation can never know the weapons of the next” (p.20)
(ときどき、だれかから聞いた話を、彼がうさん臭そうに話してくれることがある。そんなとき、わたしはいらいらしてしまう。……いずれかれはわたしを打ち倒そうとするだろう。……ただ問題は、つぎの世代がなにを武器にするのか、まえの世代には分からないということだ) (p.29)

「だれかから聞いた話」が孕む思想は、Boboを通じて母へと運ばれる。謂わば彼は、白人の学校に充満する危険思想とElizabethとを繋ぐ、パイプ役をも担っている。そんな彼の仕事に「いらいら」するとはいえ、彼をここに送り込んだのはElizabethその人なのだ。学校で仕入れた話を、とりあえずのところは「うさん臭そう」に話すものの、Maxの言葉を借りて“Moral sclerosis” (p.40) (精神的な動脈硬化) (p.54) と言うところ、やがて息子はその感覚を麻痺させてしまわぬ保証は何処にもないのである。

彼はまさに、あらゆる将来可能性という意味での危うさを持ち合わせている。それは、当時の南アフリカが抱えていた、予測不能な歴史展望への不安を表しているようにも思える。一筋縄ではいかない子育ての難しさに揺れるElizabethの心情にも、Boboが体现する「危うさ」という要素を見ることができよう。そういった意味で、彼は多分にシビアな存在なのである。こうしたBoboの危うさにこそ、Gordimerのリアリズム作家としての真髄を見ることができ、教育学的観点から言えば、当時の白人もその被害者となり得ることを示唆していると受け取るに無理ない。Gordimerは、白人に施される教育もまた、白人を支配者として社会化する装置であることを暴露しているのである。

6. *The Late Bourgeois World*における「学校」

加えて注目したいのは、本作品において、学校と、Elizabeth・Boboとの親子関係、即ち家庭とが、一定の距離をもって明確に切り離されていることの効果である。

まずは、来客応接室での親子のやりとりに注目したい。

“He hugged me and we giggled, as we always do with the glee of being together and clandestine to school and everything else.” (p.15)

(かれはわたしをしっかりと抱きしめ、わたしたちはくすくす笑った。わたしたちはいつもそうやって、また会えた喜びを、学校にも、ほかのすべてに対しても、内緒にするように確かめ合う。) (p.22)

“We sat down together on the awful little settee, like lovers facing each other for a declaration in a Victorian illustration.” (p.15)

(わたしたちは趣味の悪い小さなソファーに並んですわり、ヴィクトリア朝の挿絵のなかの、いまにも愛の告白をする恋人同士のように、向き合った。) (p.23)

このように、ElizabethがBoboに会えたことは、常に（本来は）2人だけの秘密なのである。この親密な瞬間こそ、少なくとも彼女にとって、安堵と静寂で意識の隅々まで満たしてくれる源泉なのであろう。こうした、学校制度とは親子共に心理的に距離を置いた家庭を描くことで、当時の学校という空間の異様ぶりが強調されている。そして、このことは、部屋を出た親子の様子から一層浮き彫りになっている。

“We kept to the formal, deserted front garden, away from the other boys. … like people in hospital grounds who are relieved to have left the patient behind for a while.” (p.17)

(型どおりに設計された正面の庭に、人影はなかった。わたしたちはずっとそこにいたまま、ほかの少年たちからは離れていた。……病院の庭に出てきた人たちのように、しばし患者から解放されてほっと一息ついている感じだった。) (pp.25-26)

「患者」とは、Gordimerの会心の一撃であり、あまりにも攻撃的な比喩であろう。まさしく、人種差別という病魔に脳が侵されているとでも言うべきか。しかしここは、患者を「生み、育てる」病院であるという点で、より一層脅威である。

こうした本作における学校の性格は、例えば、イギリスの教養小説（Bildungsroman）におけるそれとは、およそ対照的である。18世紀から19世紀への移行を通じて発展した当国の教養小説は、主人公が自我の精神的ないし道徳的発達を遂げようとする様子を描いた、内省的物語である。そこに至る過程において、様々な出来事が主人公に対して促進的、あるいは妨害的に作用していく。その中でも、学校、特に寄宿学校は、恵まれない境遇の子どもが、単に大人への発達段階を経る舞台に留まらない。そうではなくて、中産階級として更に社会的上昇を達成するための教養や資格を身につける、謂わば「機会提供の場」として登場する。ところが、坂本（2016）が述べているように、Gordimerの小説における成長の過程では、自分たちの置

かれた社会的ないし政治的現実を問い、それを乗り越えようとしていく^[59]。彼女の考えるアパルトヘイト体制下での真の成長は、体制の中での成功ではなくて、体制に抗い自分を解放することでしか実現することが出来ない。従って、(寄宿)学校は、抗うべき体制の縮図として描かれるのである。アパルトヘイト体制下において、人種がそのままイギリスで言うところの階級(それも法律によって固定化された)と同じ意味を持っている南アフリカでは、主題にもある“Bourgeois”とは他でもなく「白人」を指す。当然、*The Late Bourgeois World*という主題には、「無条件に白人をブルジョワ階級に位置させるアパルトヘイト社会は終焉するべきである」という考え、ないしは願いのようなものが込められていると見える。南アフリカで白人が受ける教育は、まさしく白人を支配者として社会化する教育であるが、それを主題に託されたテーマと関連させれば、まさに学校、特に寄宿学校は、南アフリカにおける白人というブルジョワ階級の養成所であり、終わらせるべき悪しきシステムの1つとして意図的に、「反体制的視点を持つ親子」の目を通して暴かれていると言えるのである。

さて、読者は本作品を通じて、Elizabeth・Bobo親子の中に入り込み、密かにその会話を共有している。この秘密は、当時の体制派の人間の耳に触れてはならず、そういった意味で、潜在的にある種の緊張感を孕む体験なのである。そして、それに共感する形で、当時の学校という場所の異様さを感覚的に、また客観的に会得することができる。ここにもまた、Boboが当時の学校による思想的教化に(今のところは)染まらず、そこから心理的に独立しているかのような描かれ方をする意味があると言える。この作品からGordimerが投げ掛けてくる1つの問題提起は、まさに、読者が親子からこの感覚を得ることから始まるのであろう。Gordimerはそれを、黒人ではなく、白人の学校という舞台から訴えようとした。黒人の学校現場における厳しさに理解を示しながら^[60]も、あくまで自らの白人としての立場からこの問題を追究しよう、という姿勢の表れであり、この点において、彼女の試みは非常に挑戦的なのである。そういった意味で、Gordimerが「白人でありながら、黒人の側から書いた」作家だと断言するのは、些か慎重さに欠けると感じざるを得ない。彼女は南アフリカ現代史の誠実な表現者であると共に、そうあろうとするが故に強調される、白人作家という立場の難しさ、また不可避的な孤独との内的闘争を強いられたのである。ここにこそ、まさしく本作品が宿す力強さの根源を見ることができる。そして、先に触れた先天的要因がもたらす限界こそあれ、この体験はなんにも、アフリカンネイティブ同士の間だけに共有可能な実存感覚に独占されるものではないはずである。

[59] 『ナディン・ゴードイマが描いた南アフリカ社会—人種、ジェンダー、セクシュアリティが交差する国家と家族のポリティクス』p.44, 坂本利子, 第三書館, 2016年

[60] ナディン・ゴードイマ 著, 高野フミ 訳, 前掲書, p.27

7. 「英文学」作品としての*The Late Bourgeois World*

最後に、本稿の主軸でもある「広く英語圏に展開する英文学」としての視点を当てて、*The Late Bourgeois World*における「学校」像の意義について考察してみたい。そうすることによって、アフリカ英語文学ならではの側面が垣間見えるように思う。

さて、Gordimerの作風は、外部世界に南アフリカという特殊な社会を解釈して提示するところにある。その際、彼女自身が他のアフリカ作家たちと同様に、「二重の立場」に置かれていることを意識せずにはいられない。Gordimerはこの問題を強く認識しており、それは次の発言からも明らかである。

「南アフリカにいたので、地域的にはアフリカの作家です。しかし、同時に英語圏の作家です。英文学の一部であり、同時にアフリカ文学の一部です。^[61]」

こうして、Gordimer作品を英文学の一部として見たとき、そこには、可能性と限界が共存しているように思う。それはいずれも、当時の南アフリカの状況に照らして、「英語」という言語が持ち得る性格に由来するものである。

当時、英語は既に世界的優位を確立しており、国境を越えて多くの人々に情報を発信するに最適の道具であった。現に、Gordimerの作品は国外に多くの読者を獲得している。英語が内包するこうした力にGordimerがどれほど自覚的であったかについては定かではない。しかしながら、その国際性と近代性の故に、(それが彼女にとって書くことの第一義的な目的ではなかったとしても、)結果として英語は、アパルトヘイト制度化における歪んだ教育の実態を外部世界に晒す、最も有効な媒体だったのである。特に、Gordimerが本作品に取り組んだ1960年代は、彼女自身の内面で政治的意識が高まっていく時期でもあった。また、それを差し引いたとしても、当時の南アフリカのように政治が直接的に人々の生を脅かすとき、作家が政治的意図を持つと持たないにかかわらず、文学による創作活動と政治状況とは切り離すことの出来ない関係にあったのである^[62]。このことは、作品の内容のみならず、その形式についても同様であろう。英語という言語形式は、作品に対して必然的に特異な政治的意味合いを付与している。

しかしながら、それはまた、母語を異にする黒人たちに寄り添う気持ちも反映していたように見える。そのことを示すため、先にも引用したインタビューにおける、彼女の次の発言に着目したい。

[61] ナディン・ゴードイマ 著、高野フミ 訳、前掲書、p.49-50

[62] 「カラー・バーの向こうへ—ナディン・ゴードイマ試論—」 p.35、福島富士男、『Walpurgis : 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要 88』、1987年

「英語は読めるけれども、それで小説を読む楽しみを得るためには英語力が大ざっぱすぎ
る黒人の中に、大勢の潜在的読者がいることを確信しているのです。〔63〕」

このように、Gordimerにとって英語は、南アフリカの外界との交渉手段であると同時に、フェルトの内側に閉じ込められた白人社会を抜け出して、その先にいる黒人たちと交渉する可能性も持ち得たのである。例えば、白人の学校の抑圧的な姿を暴き、アパルトヘイト社会の一員として白人の子どもを社会化する抑圧的側面を知らしめる対象として想定される読者は、必ずしも私たちのように、南アフリカの外にいる人間だけに限定されない。黒人たちに対してもその醜態を晒し、問題意識を共有しようという意図があったとしても、不思議ではなからう。そうして、本作においては、「学校」がその最適な素材であるように思われた。何故なら、黒人の歴史的、実存的生活状況を生きて共有できない白人は、黒人作家が扱う主題を以って彼らに力を添えようとするのは出来ないからである。仮に「黒人たちの悲惨な生活を盗みとつ〔64〕」て素材とするようなことがあれば、むしろ、黒人から反感を買う立場に身を置くこととなる。白人はあくまで、白人の生活の中からその素材を持ち出してくる以外にない。その点において、本作品中の「学校」が果たす役割の重要性は（その描写に割かれている頁数は少ないながらも）計り知れない。それは、「学校」こそ、Gordimer自身が実感的に得た状況を「白人の側から」真実に即して具に描写するという、交渉に求められる誠実性を担保し得る、確固たる存在であったことに由来する〔65〕。フェルトの内側の白人社会に隔離された彼女の実感的な作品は、南アフリカという固有の土地に根差した固有の歴史過程の一部であり〔66〕、フィクションでありながら、その歴史的文献としての価値も高く認められている。前項までで論じてきた本作における「学校」像は、全てその誠実さの裏返しであり、かくして、「英文学」としてのアフリカ文学を通じて、当時の南アフリカという1つの現実世界の中で生きる白人と黒人が通じ合うことになるのである。

さて、一方で、自らの母語である英語で自在に物が書け、声を上げることができるということは、上記のような可能性と共に、植民地支配者の言語を操る白人であるという事実を浮き彫りにし、それに伴う限界もまた露わにする。

本稿において既に何度も言及しているバンツール教育法は、言語政策的な側面も持ち合わせていた。同法施行前の黒人教育では、英語（あるいはアフリカーンス語）が初等教育段階の教育

〔63〕 ナディン・ゴードイマ、前掲書、p.90

〔64〕 ナディン・ゴードイマ 著、ステイーヴン・クリングマン 編、福島富士男 訳、前掲書、p.310

〔65〕 Gordimerには他にも、白人の子どもと教育との関係を扱った作品がある。例えば、短編“Town and Country Lovers”（1982年）のうち“Country Lovers”（1975年）には、まさに白人少年（Paulus）が全寮制の寄宿学校で支配者として社会化され、幼馴染のアフリカ人少女（Thebedi）と対等に付き合うことが出来なくなってゆく様子が描かれている。

〔66〕 『バーガーの娘 2』 p.628、ナディン・ゴードイマ 著、福島富士男 訳、みすず書房、1996年

言語とされていた。ところが、バンツール教育法によって、黒人の同段階においては母語教育の推進が行われた。これは、黒人文化の尊重などといった多文化や多言語への理解を示すものではなく、むしろ、言語を同じくする小集団ごとに黒人を分断し、民族諸語の中に封じ込めようという目論見であった。その一方で、中等教育では英語とアフリカーンス語が強要され、この言語政策上の矛盾によって、多くの黒人は中等教育から排除されることとなった^[67]。事実、都市部ではアフリカ人を対象とした中等教育の建設や定員が厳しく制限され、1971年時点で、学校数はアフリカ人家庭8万世帯に1校しかなく^[68]、中等教育に進む生徒数は、全黒人人口の僅か4.5%に過ぎなかったという^[69]。都市部の中等学校に進学できなかった黒人生徒は、低賃金労働者として生きるか、親元を離れてホームランド^[70]にある数少ない中等学校に通学するかを選択することとなるが、後者の道もそう容易ではなかった。その結果、かつて存在していた黒人の英語学習の機会を奪われ、その英語能力は著しく低下した。英語の運用能力は、謂わばアパルトヘイトの制度化において白人に取り上げられ、実質的に独占された特権の1つと化したのである^[71]。また、Gordimerは、黒人作家たちが英語を用いて物を書こうとするときにおいても、それを自分たちの母語ではない言語で書かざるを得ない、という状況として問題視していた。現に、英語という借り物の言語によっては、黒人作家らが自らの考えを表明することは不可能であると断言している^[72]。この信念は、被支配者の側から見ても、例えば、ケニアのNgũgĩ wa Thiong'o（グギ・ワ・ジオンゴ、1938年1月5日－）やセネガルのSembène Ousmane（センベヌ・ウスマン、1923年1月1日－2007年6月9日）が、それぞれ支配者層の言語である英語やフランス語による文学を批判した^[73]こととも通ずるものである。ここには、特権に浴する白人という立場にありながら、反面、その特権を取り壊したいと願う自分の存在に気付いていた、Gordimerの内的葛藤を指摘することができよう。南アフリカ白人の支配階級として生まれたのであるから、Gordimerの反体制的抵抗は必然的に、白人支配者の社会内部にある彼女の立ち位置から実行されることとなる^[74]。これは限界というよりも、あるいは宿命という言葉に当てての方が相応しいかもしれない。彼女は、特権を破壊する道具として、まさにその特権の

[67] 都市部における中等教育の拡充は、1972年以降になってようやく認められた。

[68] ジョナサン・ヘイスロップ 著、山本忠行 訳、前掲書、p.236

[69] ジョナサン・ヘイスロップ 著、山本忠行 訳、前掲書、p.27

[70] 1959年の「バンツール自治促進法（Promotion of Bantu Self-government Act）」によって、黒人は民族ごとのグループに分けられ、10箇所「ホームランド」と呼ばれる劣悪な土地に強制移住させられた。

[71] Gordimerは自身の作家としての生い立ちを語る際、折に触れて図書館での学びについて言及している。当時の図書館もまた、その利用が白人のみに認められた特権であった。

[72] ナディン・ゴードイマ、前掲書、p.90

[73] それぞれの経緯等について、ここで詳述することはしない。

[74] 坂本利子、前掲書、p.108

一部を利用していることになるのである。特に、Gordimerは、1960年代後半から70年代にかけて、白人には南アフリカに居場所がない、という認識に苛まれていたという^[75]。白人である限り、本質的な意味でこの土地に迎えられることはない。このことは、自分が英語圏の作家であるということからも、多分に意識することとなったに違いない。

かくして、アフリカ英語文学を「広く英語圏に展開する英文学」の持ち物として引き取ろうとしたとき、「英語」という言語で小説を書くことの可能性と限界もまた、その独自性を形づくるのである。本稿では白人作家を対象に考察を進めたが、その様相こそ違えど、黒人作家らにとっても、英語という言語の選択はその両方を孕むものであると思われる。

冒頭で提起したように、英語圏と比較して英米中心主義的な色彩が未だ濃い「日本の英文学」の領域において、アフリカ英語文学は兎角放り置かれがちな存在であった。しかしながら、そのような英米中心主義は、現在グローバリゼーションが進む世界の英語文学の動向に従って是正されるべきであり、その中でアフリカの英語文学もまた、その範疇に入って然るべきものである。拙者がアフリカ英語文学と出会ったのは大学時代であったが、本稿で見たように、それは単にヨーロッパ文学の模倣と断ることの出来ないものであり、それぞれの社会事情や歴史的背景を色濃く反映した、得も言われぬ独特の味わいと力強さに満ちている。本稿がこうした問題に対してどれほど力強く声を上げ、また説得力を帯びた主張を残せたかについては分からない。拙者の力量不足から、アフリカ英語文学という混沌とした凝結核の周辺部を、そこはかたなく漂流することに終わった感も否めない。さりとて、読者のアフリカ英語文学への視界が拓けたとするならば、そこを第一歩として、本稿を結ぶこととしたい。

(査読あり)

[75] 『この道を行く人なしに』 p.396, ナディン・ゴードイマ 著, 福島富士男 訳, みすず書房, 2001年

8. 参考文献

- ビル・アッシュクロフト, ヘレン・ティフィン, ガレス・グリフィス 著, 木村茂雄 訳『ポストコロニアルの文学』
青土社, 1998年
- 大社淑子 「ナディン・ゴードイマー—作品解説 The Late Bourgeois World」
『英語青年137 (11)』, 1992年
- 大津和子 「南アフリカにおける教育開発—ジェンダーの視点から—」
『国際教育協論文集3』, 2000年
- 柿沼秀雄 「南アフリカのアフリカ人教育—「人種差別と教育」研究への一過程—」
『首都大学東京人文学報 教育学7』, 1971年
- 神田麻衣子 「アフリカ文学から多文化共生を考える」
『未来共生学4』, 2017年
- Gordimer, Nadine *The Late Bourgeois World*
Bloomsbury Publishing PLC, 1966
- ナディン・ゴードイマー 著, 高野フミ 訳 『ナディン・ゴードイマーは語る アフリカは誰のものか』
岩波書店, 1993年
- ナディン・ゴードイマー 著, 福島富士男 訳 『ブルジョワ世界の終わりに アフリカ文学叢書』
スリーエーネットワーク, 1994年
- ナディン・ゴードイマー 「海外文化ニュース ゴードイマー, 自身を語る」
『みすず38 (7)』, 1996年
- ナディン・ゴードイマー 著, 福島富士男 訳 『バーガーの娘2』
みすず書房, 1996年
- ナディン・ゴードイマー 著, 福島富士男 訳 『この道を行く人なしに』
みすず書房, 2001年
- ナディン・ゴードイマー 著, スティーヴン・クリングマン 編, 福島富士男 訳 『いつか月曜日に, きっと』
みすず書房, 2005年
- 坂本利子 『ナディン・ゴードイマーが描いた南アフリカ社会—人種, ジェンダー, セクシュアリティが交差する国家と家族のポリティクス』
第三書館, 2016年
- 砂野幸稔 「アフリカ文学研究: 回顧と展望」
『アフリカ研究57』, 2001年
- 土屋哲 「ナディン・ゴードイマーの世界」
『英語青年120 (11)』, 1975年
- 土屋哲 「二つの糸の縫れ合うなかで」
『英語青年137 (11)』, 1992年
- レナード・トンブソン 著, 宮本正興, 吉國恒雄, 峯陽一, 鶴見直城 訳 『南アフリカの歴史 最新版』
明石書店, 2009年
- 福島富士男 「カラー・バーの向こうへ—ナディン・ゴードイマー試論—」
『Walpurgis: 國學院大學外国語研究室・外国語文化学科紀要88』, 1987年
- 福島富士男 「南アの歴史に出会う場所を求めて—ナディン・ゴードイマーの世界」
『月刊アフリカ32 (1)』, 1992年
- 福島富士男 『アフリカ文学叢書・別巻 アフリカ文学読みはじめ』
スリーエーネットワーク, 1999年
- 福島富士男 「カラー・バーが消えるとき—ゴードイマー文学の行方」
『神奈川大学評論51』, 2005年

ジョナサン・ヘイスロップ 著，山本忠行 訳 『アパルトヘイト教育史』
春風社，2004年

宮本正興 「アフリカ文学 一思潮の概観一」
『アフリカ研究21』，1982年

吉村清 「学術資料 イギリス文学講義資料 アフリカを舞台にした英語文学：ペイン，コンラッド，
ゴードイマー，アチェベ，そしてクツェー」
『琉球大学欧米文化論集46』，2002年